## 機械学習基礎実践 演習テキスト

荒木雅弘

2018年5月30日

## 第1章

## パターン認識概要

### 1.1 演習の目的

プロトタイプが与えられたという前提で、最近傍決定則を Scilab でコーディングし、パターン認識の基本的な手順を理解します。

#### 1.2 準備

演習問題を解く際に用いる Scilab の機能を確認します。

- 1. 変数に行列を代入する
- 2. 行列のサイズを求める (size 関数)
- 3. 行列から特定の行を抜き出す
- 4. 行列から特定の列を抜き出す
- 5. ゼロ行列を作成する (zeros 関数)
- 6. 変数にベクトルを代入する
- 7. ベクトルの大きさを求める (sum, sqrt, norm 関数)
- 8.2つのベクトルの距離を求める
- 9. for 文による繰り返し
- 10. 変数の値を表示する (disp 関数)
- 11. 最小値を求める (min 関数)
- 12. 最小値を与える位置を求める
- 13. 行列を複製する(repmat 関数)
- 14. 行列を結合する
- 15. ベクトルを行列に変換
- 16. ベクトルを文字列に変換
- 17. 正規表現で文字列マッチング

--> M = [1 2 3; 4 5 6]

M =

- .. 2. 3.
- 4. 5. 6

--> [r c] = size(M)

```
c =
 3.
r =
 2.
--> size(M,'r')
ans =
 2.
--> size(M,'c')
ans =
 3.
--> M(1,:)
ans = 1. 2. 3.
--> M(:,2)
ans =
 2.
  5.
--> zeros(2, 3)
ans =
 0. 0. 0.
  0. 0. 0.
--> z = zeros()
z =
0.
--> z(3) = 5
z =
 0.
 0.
5.
--> v1 = [1 1]
v1 =
 1. 1.
--> v2 = [7 9]
v2 =
  7. 9.
--> sqrt(sum(v1.^2))
ans =
 1.4142136
--> norm(v1)
ans =
  1.4142136
--> norm(v1 - v2)
ans =
 10.
--> for i = 1:5
--> disp(i^2)
```

```
--> end
   1.
   4.
   9.
   16.
   25.
--> a = [5 8 7 2 3];
--> min(a)
ans =
  2.
--> [m, p] = min(a)
p =
   4.
m =
   2.
--> repmat(M,[1 2])
ans =
 1. 2. 3. 1. 2. 3.
  4. 5. 6. 4. 5. 6.
--> repmat(M,[2 1])
ans =
 1. 2. 3.
 4. 5. 6.
 1. 2. 3.
  4. 5. 6.
--> f=[]
f =
  []
--> f = [f [1 2]]
f =
  1.
  2.
--> f = [f [3 4]]
f =
 1. 3.
  2. 4.
--> matrix([1 2 3 4 5 6], [2, 3])
ans =
 1. 3. 5.
  2. 4. 6.
--> strcat(string([0 1 0 1 0]))
ans =
01010
--> regexp(ans, '/101/')
ans =
  2.
```

#### 実践演習 1-1

ソースコード 1.1 の (ア), (イ) を埋め, 例題 1.1 の計算過程を実行する Scilab のコードを完成させよ.

ソースコード 1.1 例題 1.1

```
clear;
P = [[0,1,1,1,0,..
      1,0,0,0,1,..
      1,0,0,0,1,..
      1,0,0,0,1,..
      0,1,1,1,0],,..
     [0,0,1,0,0,...
      0,0,1,0,0,..
      0,0,1,0,0,..
      0,0,1,0,0,..
      0,0,1,0,0],...
     [0,1,1,1,1,..
      1,0,0,1,0,..
      0,0,1,0,0,..
      0,1,0,0,0,..
      1,1,1,1,1]',...
     [0,1,1,1,0,...
      1,0,0,0,1,..
      0,0,1,1,0,..
      1,0,0,0,1,..
0,1,1,1,0]',..
     [0,0,1,0,0,..
      0,1,0,0,0,..
      1,0,0,1,0,..
      1,1,1,1,1,.
      0,0,0,1,0];
x = [0,0,0,1,0,..]
     0,0,0,1,0,..
     0,0,0,1,0,..
     0,0,0,1,0,..
     0,0,0,1,0];
dist = zeros();
for i = 1: (\mathcal{P})
    dist(i) = norm(P((1)) - x);
end
[mindist, ans] = min(dist);
disp("Ans = "+string(ans-1))
```

### 実践演習 1-2

ソースコード 1.1 の for ループ処理を repmat 関数を用いた行列演算に置き換えよ.

#### 実践演習 1-3

演習問題 1.1 の指示に従い、特徴抽出を行う機能をソースコード 1.1 に追加して、特徴抽出後の特徴ベクトルを用いて識別を行え、ただし、特徴ベクトルは、縦・横の直線数の計算のみでよい。

## 第2章

## 前処理

#### 2.1 演習の目的

画像データを対象に、パターン認識の前処理段階で行うフィルタ処理を Scilab でコーディングし、効果を確認します。

### 2.2 Scilab への画像処理モジュールインストール

Scilab で画像を扱う際には、外部モジュールである Image Processing and Computer Vision Module を使うと便利です。以下の手順でインストールしてください。

- 1. Scilab を起動後、メニューの [アプリケーション] から [モジュール管理] を選択し、モジュール管 理画面を表示。
- 2. 左側ペインから [画像処理] を選択。
- 3. 画像処理が展開され、[Image Processing and Computer Vision Toolbox] が表示されるので、それを選択。
- 4. 右側ペインの [インストール] ボタンを押してインストール開始。
- 5. インストールが終了したら Scilab を再起動し、起動後に"Start IPCV 1.2 for Scilab 6.0"というメッセージが表示されればインストール成功。

### 2.3 準備

演習では、扱いやすい濃淡画像を対象データとします。画像を行列データとして読み込んだ後、各種フィルタ処理を Scilab でコーディングします。

- 1. 画像データを行列として読み込む(imread 関数)
- 2. 画像データを倍精度浮動小数点数に変換 (im2double 関数)
- 3. 画像を表示する (imshow 関数)
- 4. 画像をファイルに出力する(imwrite 関数)
- 5. 中間値を求める (median 関数)
- 6.2 重ループ

<sup>--&</sup>gt;im=imread('test1.pgm') // im は整数 (0~255) の 120x120 行列

第 2 章 前処理 6

```
-->im2=im2double(im) // 整数から倍精度表現 (0~1) に変換
```

-->imshow(im2)



```
-->imwrite(im2, 'out.png') // pgm, jpg, png, bmp, tiff も可
-->a = [5 8 7 2 3];
-->median(a)
ans =
   5.
-->b = [5 8 7 2 3 4];
-->median(b)
ans =
   4.5
-->for i=1:9
--> for j=1:9
--> printf("%3d",i*j)
--> end
--> printf("\n")
-->end
 1 2 3 4 5 6 7 8 9
 2 4 6 8 10 12 14 16 18
 3 6 9 12 15 18 21 24 27
 4 8 12 16 20 24 28 32 36
 5 10 15 20 25 30 35 40 45
 6 12 18 24 30 36 42 48 54
 7 14 21 28 35 42 49 56 63
 8 16 24 32 40 48 56 64 72
 9 18 27 36 45 54 63 72 81
```

### 実践演習 2-1

空欄(ア)、(イ)を埋め、入力画像にメディアンフィルタを適用する Scilab のコードを完成させよ.

```
clear;

// 画像データの読み込み
im = im2double(imread('test1.pgm'));

// 2次元配列 im のサイズ取得
[h w] = size(im);

// 結果格納用の配列 resultim を用意
resultim = ones(im);
```

第 2 章 前処理 7

```
// メディアンフィルタ適用
for y = 2:h-1
    for x = 2:w-1
        resultim( (ア) ) = median(im( (イ) ));
    end
end

// 結果の表示とファイルへの出力
imshow([im, resultim])
imwrite([im, resultim], 'out.png');
```

### 実践演習 2-2

実践演習 2-1 のコードに平均値フィルタ処理を加え、原画像、メディアンフィルタ適用後、平均値フィルタ適用後の画像を並べて結果を比較せよ。

### 実践演習 2-3

入力画像に Sobel フィルタ(第2章講義スライド参照)を適用するコードを作成せよ。

### 実践演習 2-4

実践演習 2-3 のコードに、最大値プーリングを行う処理を追加せよ。

# 第3章

# 特徴抽出

### 3.1 演習の目的

パターン認識の特徴抽出段階で行う標準化と主成分分析を Scilab でコーディングし、多次元データの可視化手順を習得します。

#### 3.2 準備

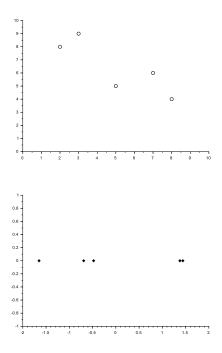
- 1. 平均値を求める (mean 関数)
- 2. 分散を求める (variance 関数)
- 3. 標準偏差を求める (stdev 関数)
- 4. 行列に対し、列ごとに平均値・分散を求める
- 5. 行列に対し、共分散行列を求める(cov 関数)
- 6. 主成分分析を行う (pca 関数)
- 7. 複数のグラフの表示場所を設定する(subplot 関数)
- 8. グラフを表示する (plot2d 関数)
- 9. CSV ファイルを読み込む (csvRead 関数)

```
-->a = [5 8 7 2 3];
-->mean(a)
ans =
   5.
-->variance(a)
ans =
   6.5
-->stdev(a)
ans =
   2.5495098
-->M = [5 5; 8 4; 7 6; 2 8; 3 9]
   5. 5.
   8.
         6.
   7.
    2.
         8.
```

第 3 章 特徵抽出 9

```
3. 9.
-->mean(M, 'r')
ans =
   5. 6.4
-->variance(M, 'r')
ans =
   6.5
        4.3
-->cov(M)
ans =
  6.5 - 4.5
 - 4.5 4.3
-->[1 f c] = pca(M)
                            // 主成分
c =
 - 0.4773960 0.4773960
 - 1.6504435 - 0.0136571
 - 0.6910991 - 0.4183013
   1.3776458
             0.2864548
   1.4412928 - 0.3318924
                            // 固有ベクトル
 - 0.7071068 - 0.7071068
   0.7071068 - 0.7071068
                            // 固有値・全体に対する比
1 =
   1.8511804
             0.9255902
   0.1488196 0.0744098
--> subplot(2, 1 ,1)
--> plot2d(M(:,1), M(:,2), style=-9, rect=[0,0,10,10])
--> subplot(2, 1 ,2)
--> plot2d(c(:,1)', zeros(1,length(c(:,1))), style=-4, rect=[-2,-1,2,1])
--> M = csvRead('iris.csv');
```

第 3 章 特徵抽出 10



#### 実践演習 3-1

ソースコード 3.1 の空欄を埋め、データの標準化と主成分分析を行う Scilab のコードを完成させよ。

ソースコード 3.1 標準化・主成分分析

```
clear;

x=[3 2; 3 4; 5 4; 5 6];
[n d] = (ア) (x);
// 元データの表示
subplot(2,1,1);
plot2d(x(:,1), x(:,2), style=-9, rect=[0,0,8,8])

// 標準化
m = (イ) (x, 'r');
s = (ウ) (x, 'r');
normX = (x - repmat((エ),[n,1])) ./ repmat((オ),[n,1]);

// 標準化後のデータの表示
subplot(2,1,2);
plot2d(normX(:,1), normX(:,2), style=-10, rect=[-2,-2,2,2])

// 主成分分析
[lambda, facpr, comprinc] = (カ) (normX);
z = normX * facpr(:,1);
disp(z)
```

#### 実践演習 3-2

アヤメの分類問題のサンプルデータ iris.csv を読み込み、4 次元のデータを 2 次元で可視化せよ。なお、iris データは、花びらの幅・長さ、萼の幅・長さのデータから、3 種類のアヤメを識別するための学習データである。